

定本版

山本有三全集

第四卷

新潮社版

編纂

土屋文明

高橋健二

*

題字

土屋文明

生きとし
生けるもの

.....
© Hana Yamamoto.
1977. Printed
in Japan.

乱丁・落丁本は、ご
面倒ですが小社通信
係宛ご送付下さい。
送料小社負担にてお
取替えいたします。

山本有三全集第四卷

定価三〇〇〇円

昭和五十二年一月二十日 印刷
昭和五十二年一月二十五日 発行

著者 山本有三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
業務部・〇三二六六一五一一
編集部・〇三二六六一五四二二
振替東京四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 神田 加藤製本

山本有三全集第4卷
目次

生きとし生けるもの

五

兄弟

一八

雪

一九

子役

二七

チョコレート

三九

ふしゃくしんみよう

二六

こぶ

三三

「作者のことば」など

三六

編集後記

高橋健二

三七

山本有三全集第4卷

生きとし生けるもの

目次

周作	七
夏樹	二九
独立	三
日かげの人びと	五
ゆき子	一〇七
婚約	一四五
沈黙のさんげ	一六

周 作

一

周作は、石炭と同じように、暗い土の底で生まれた。つめたい砂岩が、彼の最初におかれた寝どこだった。それから、トロッコに積まれて、石炭といっしょに坑外に運びだされたのである。

彼の両親は、ふたりとも坑内で働く労働者だった。父は石炭を掘りだす採炭夫であり、母はそれを運びだす雑役婦だった。炭山では、俗に、これを「さき山」、「あと山」と言っている。あと山は彼女のように女が多かった。女の仕事にしては、賃銀がよかったからである。しかし、それはどの女にでもできる仕事ではない。まず第一に、からだがかん健でなくってはならない。それから、女のはにかみを、しばらくどこかに預けておける女でなくってはならない。なんとすれば、彼女たちは胸と腰とに、申しわけばかりの布をまとただけで、男たちといっしょに働かなければならないからである。けれども、彼女らは、着ものを着て家にじっとすわっていることを、許されない人びとなのである。生活が彼女から着ものをはぎ取って、いやでもおうでも、ここへ追いこむのである。あと山のおもな仕事は、さき山の掘った石炭をタガラにいれて、トロッコの来ているところまで

運んで行くことであるが、タガラに石炭をいっぱい詰めると、少なくとも十五、六貫はある。それを背にして、低い低い坑内をうんしょんしょいよい出すのである。彼女らは着ものを奪われるばかりか、まっすぐに歩くことさえ禁ぜられているように見える。あたまの上には、うわ盤の岩が、重たくおおいかぶさっている。背なかには十五貫のタガラがのしかかっている。

周作の母は、ある日、いつものようにタガラをしょって、トロのあるほうへあえぎあえぎ歩いて行った。わき水がワラジばきのす、足にうるさくからみついた。いつも坑内を流れている水ではあるが、それが、きょうは、ひどくこたえた。腰を水の中にひたしているような気がした。さっきから痛みだしていた痛みが、一層はげしく腹部を襲ってきた。

「あれかしら。」

彼女はすぐそう思った。しかし、まだそれまでには、はつかや十五日はあるはずだ。

「いや、そんなはずはない。そんなはずはない。」

と思い返した。しかし、どう思い返しても、痛みは少しもひかなかった。それどころか、いよいよはげしく差しこんできた。彼女は、もう前へも、うしろへも動けなかった。鳥のとまり木のような形をした息ツエを突っぱったまま、彼女はしばらくそこに立ちどまった。けれども、もう立っていることさえできなかった。彼女は力なく倒れてしまった。その時、タガラの石炭がバラバラこぼれて、彼女の首や肩を打った。が、そんなことは、もとより彼女は気づかなかった。それでも、水にぬれないように、した盤の少し高くなっているところに、無意識にはいあがった。苦しい息が、ケージか何かで無理に押しあげられるように、まをおいて、「ハッ、ハッ」と腹の底からもちやがってきた。

彼女は夫を呼ぼうと思って、キリハのほうへなんどか声をかけた。しかし、夫の働いているとこ

ろは、坑道が少し曲がったさきなので、よく通じなかった。石炭をくだしているツルツパシの音だけが、かすかに聞こえてくるだけだった。

「困ったな。こんなことなら、シキ（坑内）へはいらんじゃなかったに。」

と、彼女は思った。が、今さら、どうもできなかった。けれども、とにかく、うい産でないことが、いくら彼女の不安心を少なくした。なあに、ひとりだって、どうにかならぬことはない。なまじっか男の手なんか借りるよりは、ひとりで始末したほうが、かえっていい、とも考えた。

どこかでドーン、ドーンと、太鼓をたたいているような音が聞こえてきた。おそらく、遠くのヒキタテでハッパをかけていたものと思うが、それが彼女には大きな太鼓の音のように聞こえた。やがて、その響きがだんだん近くなって、ついに、太鼓のバチが自分の背なかにはげしく加えられたと思った瞬間に、彼女はひとりの男の子を生みおとした。それがこの周作である。予定日より半つき以上も早い出産であった。過激な労働が、胎児を母のふところに、もつととどめておくことを許さなかったものらしい。

二

周作は、こうして世の中に送りだされたのであるが、ちいさく生まれたわりには、大きく成長していた。小学校にかようころには、かえってほかの子どもたちよりも、ずつとがっしりした体格を備えていた。ことに、学校がよくできて、毎学年、いつも優等賞をもらわないことはなかった。それで彼は、いつのまにか、「塊炭」というあだ名をつけられるようになった。石炭はその切りだされる大ききや、質に従って、塊炭、切りこみ、粉炭、スポタなどに区別されるが、塊炭は、むろん一番優良のものをさすのである。しかし、彼がそう呼ばれる裏には、彼が坑内で生まれたことを冷やか

す意味がふくまれていた。事実、彼は塊炭のような少年であった。塊炭のようにがっしりしており、塊炭のように黙りこくっていた。けれども、ひとたび事に激すると、塊炭のようにはげしく燃えあがった。

その時分、こんなことがあった。

彼が母に言いつけられて、供給所に塩を買いにやらされた帰り道でのことであった。彼より一つ、二つ、年うえの、及川（おいかわ）という坑内係り長のむすこが、道ばたの木の根かたにナワを低く結びつけ、道路の上を横ぎってその一端を年したの子どもに持たせ、自分はムチのような細い棒を持って、そのそばに突っ立っていた。そして、そこに遊んでいる子どもたちを、しかり飛ばしながら、そのナワの下をくぐらせていた。くぐる時、もし、あたまをもたげたり、背なかを高くして、ちよつとでもナワにからだがふれようものなら、

「こらっ。」

と、ムチを振りおろしていた。

そこに遊んでいる子どもは、多くは坑夫の子どもだった。彼らは坑内係り長のむすこに対する尊敬と、ムチに対する恐れとから、地上に腹んばいになりながら、ほとんど、どろをなめるようにして、一列になってナワをくぐり抜けていた。そして、いったん、くぐり抜けると、また、もとへくぐり返すことを、しいられていた。かくて、なん回も、なん回も、一本のナワの下を、子どもたちはミミズのように、はいまわっていた。

さっき、周作が供給所へ行った時には、彼らはここでナワ飛びをして遊んでいたのだが、おそらく、それにあきて、こんなことを始めたのだろう。しかし、彼には、最初、なんでみんなが、あんなにはいまわっているのか、わからなかった。彼はむしろ好奇心を持って、そばに近づいて行った。

すると、

「やい、塊炭、ここをくぐれ。」

と、いきなり、あびせられた。

周作はむっとした。

「おらあ、いやだ。」

「何がいやだ。ここは関所だぞ。ここを通るものは、みんな、くぐって行くんだ。」

係り長のむすこは声を強めて言った。

しかし、周作は、なんとしても、ミミズのようなまねをすることはイヤだった。いっそ、彼は引返して、ほかの道を行こうかとも考えた。が、彼の自尊心はそれを許さなかった。

「何もくぐらなくていいじゃないか。飛んだのだからかまわないだろう。」

「いけない。くぐるんだ。」

「そんなことできるもんか。ナワにさえさわらなければ、いいじゃないか。おれはここを飛んで行く。」

「飛ぶ。きさま、きつと飛ぶか。」

及川はナワを持っていた少年から、急にそれをひったくるやいなや、左の手で、ぐいと、その一端を引っ張りあげた。

「さあ、飛ぶんなら飛んでみろ。そのかわり、ちょっとでもナワにさわったら、これだぞ。」

そう言って、じつと周作をにらみつけながら、ムチを高く空中に振りあげた。

周作は、ちっともムチを恐れなかった。彼は立派に飛んで見せる自信を持っていた。ことに、ナワの結びつけてある木の近くを飛ばば、またいで行けるぐらいの高さだから、なんでもなかった。けれども、彼は、そんな、だれでも飛べるようなところを選ぶのは、ひきょうだと思った。彼は堂々とまん中のところを飛んでやろうと考えた。で、塩を入れたサルを小わきにかかえたまま、ポーンとそこを飛んだ。

及川はその時、急に足をすくおうとして、ナワをしゃくりあげた。けれども、わずかに周作の着ものすそにふれただけで、彼を倒すことはできなかった。

周作はわれながら見ごとに飛んだと思った。彼は足が地についた時、軽い優越感を覚えた。と背なかにびりっと、あついものが食い入った。ムチが打ちおろされたのである。

「何をするんだ。」

「きさまがナワにさわったからさ。」

「なに言ってるんだい。そっちでナワをもちやげたんじゃないか。」

「うそをつけ。」

また、ムチがおりにきた。そうになると、周作はもう受け身ではいなかった。あい手が年うえであらうと、坑内係り長のむすこであらうと、そんなことには容赦がなかった。いきなり彼は飛びかかって、そのムチをひったくろうとした。向こうはそうさせまいとした。たちまち、はげしい取っ組み合いが起こった。どっちも上になったり、下になったりした。が、おとなが来て、ようやく両方を引き分けた。周作は目の下に少しかすり傷を受けたけれども、及川のひたいにも血とどろがにじ

んでいるのを見て、安心したような気もちがした。

彼がどろまみれになった塩のザルをさげて、うちへ帰って行くと、父おやは、ちょうど三時交替で、シキからもどってきたところらしく、共同流し場で足を洗っているところだった。

「なんだ、そのツラは。」

彼は周作を見ると、鋭くそう言った。

「ケンカしてきたのか、きさまは。」

周作はどぎまぎして、ちよつとすぐには返事ができなかった。それでも、つばを飲みこんで、なるべく父の顔を見ないようにしながら、さっきのできごとをできるだけわしく話したそうとした。しかし、父おやはまだ半分も聞かないうちに、

「きさまが悪いんだ。」

と、急に彼をどなりつけた。

「ううん、おれが悪いんじゃない、向こうが乱暴なんだよ。」

「いいや、そうじゃねえ、きさまのほうが悪い。きさまがよけいなことを言うから、そんなケンカが起こるんだ。」

「だって、ナワの下をはえなんて……ナワの下をはえなんて……」

周作は泣きながら言った。

「なま意気なことを言うな。それよりも、ここへ来てツラを洗え。」

彼は流し場へ周作を引き寄せた。

「まあ、なんてツラしてるんだ。ホッペタから首ねっこまで、どろだらけじゃねえか。きさま、地べたの上で取っ組みあいをやったのか。バカな野郎だな。——それ、もっと前へ出した、前へ。ツ

ラだよ。」

彼はむすこの顔をごしごし手で洗った。

「ちゃん、痛いよ。」

「何が痛いんだ。」

「そこ、痛いんだよ。」

周作は目の下の傷を、手でおさえようとした。

「ケンカなんかしてくるから痛いんだ。いいから、こっちへ顔を向ける。まだどろがくっついてるじゃねえか。何をびくびくしてるんだ。さあ、向かねえかって言うのに。」

傷の上を手ぬぐいで冷やされると、ずいぶんしみたけれども、周作は我慢をした。

「本当に、しょうがねえ野郎だ。親に世話ばかりやかせやがって。」

父は、なお、ぶつぶつ言いながら、周作の手や足を洗ってやった。

四

周作は手ぬぐいで露を取ってもらってから、うちにはいろうとすると、彼の腕には父の手があった。

「やい、こっちへ来い。」

周作は突然なので、びくっとした。

「こっちへ来るんだ。」

彼はおやじになぐられるのかと思った。しかし、父の腕は、ただ彼をぐんぐんひっぱって行くだけだった。彼は、どこへひっぱって行かれるか、わからなかった。まもなく、ふたりは及川の玄関